

紙 碑

多次元空間を自由に脈絡もなくさまよう夢

中村 雅彦

多次元空間を自由に脈絡もなくさまよう夢。この文言は、中村先生が上越教育大学を退官される時、ご自身が自分の人生を振り返ったときの出来事を表現したものです。私にはいったいどういうことなのかわかりませんが、中村先生が考えたと思うと妙に納得してしまうのです。先生の人生は波瀾万丈という言葉がぴったりです。その中で一貫しているのは「鳥」です。鳥には人間とは違う別の世界があり、その別世界を観察し、それを描いてみようという気持ちにとりつかれ、それを論文にしたり、エッセイにしたり、本にしてきたとおっしゃっていました。言葉で描く、絵で描く、この「描く」という発想が中村先生の研究の原点だったのかもしれませんが。

中村登流先生は、私の恩師であり、上司でした。私のイワヒバリの研究の出発点を与えてくださったのは私が上越教育大学の修士課程の院生の時でした。上越教育大学に就職し、初めて社会に出たときの上司が中村登流先生でした。ですから、鳥の研究者の先輩、というよりもっと身近な存在で、深くおつきあいをさせていただきました。中村先生と一緒に執筆した原色日本野鳥生態図鑑（保育社）では、古本屋のカタログに執筆者名を中村登流・雅彦と掲載され、まるで親子のように扱われることもあるのですが、姻戚関係は全くありません。しかし、上越教育大学時代は公私ともにまるで肉親のように実に大事にしてもらいました。思えば、実はもっと昔、それもはるか昔に私は中村先生に本を通して会っているのです。私の小学校5・6年生の恩師は当時、セッカを研究していた母袋卓也先生でした。母袋先生のお父さんが事故で亡くなり、実家のある上田に帰るとき、当時、中学生だった私が母袋先生の下宿にいくとこれを読みなさいと2冊の本を渡してくれたのです。そのうちの1冊が今西錦司の「生物の世界」、もう1冊が中村登流先生の「森のひびき」だったのです。

中村先生は日本を代表する鳥の研究者です。私は中村先生が上越教育大学を退官される時業績目録を作成しました。この目録の作成に当たり、改めて先生の生き物に対する広範な興味関心と、著書や論文を通じて社会に発信した業績を知るこ



中村登流 先生

とができました。一人の研究者の研究歴を起承転結にたとえるなら、先生の長野県中学校教諭から信州大学医学部助手の約20年間は「起」にあたると思います。鳥類の生態研究など社会的に全く認知されなかった終戦後の当時において、先生はいち早くエナガの社会構造の研究を進められ、我が国の動物社会学の礎を築かれました。さらに群集生態学的研究としてカラ類の群集構造の解明、コジュリンなどホオジロ属鳥類のなわばり構造の研究へと発展されました。これらの研究は、驚くべきことに同時並行して進められ、「承」の時期にあたる信州大学教育学部助教授の10年間には、志賀高原を主調査地とし、自ら考案した適応空間の概念をもとに「森と鳥の関係」を森林性鳥類の群集構造としてまとめられました。さらに同時期「草原と鳥の関係」をホオジロ属鳥類の比較社会学として追求されました。

昭和57年に上越教育大学に移られてから「転」の時期をむかえられたかと思えます。上越教育大学では、新たに「水と鳥の関係」を調べるため、多忙な教授職の合間を縫ってイソシギの調査地である長野県梓川に毎週でかけていました。鳥学に関する数多くの啓蒙書を執筆されたのもこの時期

です。上越教育大学に赴任して間もない私は、ゼミを通じて、一種一種の生物を大切に、ひとつひとつの行動を丹念に観察しながら、その中に潜む一般原理を先生独自の感性の中でまとめあげようとする学問スタイルを学ぶことができました。たっぷりと時間をかけ、真綿で鳥の首を絞めるようにして真実を吐かせるのが研究だよ、と言っておられたことが印象に残っています。私も含め、たいていの研究者は、すぐ白か黒かをはっきりさせようとするのですが、中村登流先生は、黒か白かはっきりしないグレーゾーンをこよなく愛する研究者でした。上越教育大学を退官後は、「結」として「水と鳥の関係」をまとめたいとおっしゃっていました。退官された平成8年には山階芳麿賞を受賞し、上越教育大学名誉教授になられています。

鳥も好きでしたが、実に酒の好きな先生でした。酒に関しては長距離走者です。飲み始めて3時間で調子が整います。普通の人なら3~4時間でお開きですが、中村先生の場合は違います。ここまでがあくまで助走期間。本番はその後です。私はよく先生のお宅で酒を一緒に飲みましたが、お宅にいく前にしっかり体調を整え、あらかじめチーズを食べたり、牛乳を飲んで胃をガードしておかないと死ぬ思いをします。夕方6時から一緒に酒を飲み始め、9時頃から調子をあげ、最後は朝の4時頃まで延々と飲み続けたことが何度もありました。そのときの話しは戦争中のこと、戦後間もない頃の中学校の教師時代のこと、エナガの研究を始めた頃の話と実に多岐にわたり、新鮮でした。終戦は中学校の3年生の時だったそうで、その頃には図書館から鳥の図鑑を借りてきて、色鉛筆で鳥の絵を描いて鳥を覚えたそうです。

酒も好きでしたが、根っからの鳥好きでした。

鮮明に覚えていることがあります。環境庁（当時）の仕事で一緒に石川県の片野鴨池に行った時のことです。冬でした。鴨池観察館からじっとカモを見ていて、ふっと私の方を見て言うのです。「こういうふうにはずっと鳥を見ながら眠るように死ねたらなんて幸せなんだろう」。絶句。この人、ほんとに鳥が好きなんだ、としみじみ思った次第です。私には思いもつかない大の鳥好きです。鳥を見て考えていることも私の理解を超えていました。私の恩師の山岸哲先生は、中村登流先生を大（だい）中村、中村浩志先生を中（ちゅう）中村、そして私を小（しょう）中村と呼び、中村登流先生が体調を崩したときにはよく大中村先生は元気かと聞かれました。中村登流先生は亡くなってもわたしにとっては大中村であって、私はいつまでたっても小中村です。

中村登流先生が亡くなったとき、私はマダガスカルでオオハシモズ類の生態調査に従事していました。調査地が熱帯雨林のジャングルの中で、電話も電気もないテント生活でしたので、中村先生の訃報を知ったのは葬儀を終えた1週間も後でした。もし、先生に何かあったらまず私に連絡を下さいと奥様にいつも言っていたのに肝心なときに何の役にも立たなかったのがかえすがえす残念でなりません。マダガスカルから帰国した翌日、松本のご自宅に伺い、奥様に会ってきました。病名は胃ガンだったそうです。ガンとわかってから手術、抗ガン剤の投与などの一切の延命措置を先生は拒否したそうです。中村先生らしい。最後は痛みもなく、静かに眠るように亡くなったと奥様から聞きました。平成19年11月19日没 享年76歳。心からご冥福をお祈りします。

（上越教育大学）